論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報　告　番　号	乙　第　1221　号	氏　　名	小　塚　綾　子
論 文 審 査 担 当 者	主　　査　　桑原　宏一郎 副　　査　　今村　浩　・　柴　祐司		

（論文審査の結果の要旨）

心アミロイドーシス患者において、心臓 MRI による評価では、左室心内膜下側から始まる遅延造影（LGE）が認められ、アミロイド蛋白沈着領域と一致していると考えられている。心アミロイドーシスでは、左室心内膜下心筋へのアミロイド蛋白の沈着により左室心筋内層優位の心筋収縮障害をきたす事が予想される。

本研究は、左室壁を心筋内層と外層の 2 層に分け、スッペックルトラッキング法にて心筋ストレイン解析（円周方向, 壁厚方向, 長軸方向)を用いて心筋機能を評価した。

その結果、以下の結果を得た。

1. Group3(CHF 群)は他の 2 群に比べ、年齢や BNP 値、左房径、左室壁厚が高い傾向にあった。また、パルスドプラ法による左室流入血流波形は偽正常化パターンを呈し、拡張障害の進行が顕著であった。
2. 円周方向のストレインは 4 群間で内層、外層に有意差を認めなかった。
3. 壁厚方向のストレインは、左室基部と中部において、Group1(No LVH 群)に比較し、Group2(LVH 群)、Group3 で内層が低下していた。(P<0.001)
4. Group1 はコントロール群より内層の壁厚方向のストレインが低下していた。
5. 左室基部、中部において、長軸方向のストレインは内層、外層ともに Group1 に対し、Group2, 3 で低下を示した。
6. AL、ATTRm アミロイドーシス間では差を認めなかった。

これらの結果から、心アミロイドーシス患者において、病態早期からの左室基部、中部内層の壁厚方向と全層性の長軸方向の収縮障害の存在が明らかになった。MRI の心内膜側心筋の遅延造影と類似し、又、解剖学的な心筋の 3 層構造の収縮機能とも矛盾しない結果であった。本研究は、心アミロイドーシスの早期診断法確立に寄与すると共に、その病態メカニズム解明にも貢献することが期待される。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。